

「対象としての主体」に出会うエピソード記述

自傷・他害行動のあるリョウタとの昼食時の関与観察の検討から

石川由美子

青野清花

森下俊一

(宇都宮大学教育学部) (とちぎリハビリテーションセンター) (那須塩原市こども未来部子育て支援課)

KEY WORDS: 知的障害 自閉症 エピソード記述

(目的)

人と人が関わる中で、相手の気持ちに自分の心を寄り添わせたときに、両者の間に生まれる独特の空間や雰囲気。鯨岡(2014)は、「接面」と呼んだ。接面では、相手が「こうした」という客観的な行動が見えるだけでなく、双方の気持ちや情動が動いていることが掴み取れ、相手の気持ちが自分に浸透する実感を得られるとし、これを「間主観的に分かる」と表現した。間主観的に分かることで、相手の思いに添うことができ、その後の対応を導き出せると述べている。この接面を描き出す方法としてエピソード記述を提唱している。

本研究では、子ども発達支援センターの放課後等デイサービスを利用してリョウタ(仮名)の自傷・他害行動の意味を昼食時のエピソード記述から検討するとともに、支援者にとって「対象としての主体」である子どもを主体として理解するという点について考察を深めたい。

(方法)

対象 リョウタ(仮名) 特別支援学校高等部2年生、男子。重度の知的障害とともに広汎性発達障害の診断を受けている。療育手帳の区分はA1であった。会話は困難であるが、クレーン行動、指さし等で要求してくる姿は認められた。また自分自身をたたく引っ掻くなどの自傷、他者に対して頭突きや叩くなどの他害行動が認められた。

手続き 2000年の8月から9月の期間、関与観察を行った昼食場面でリョウタの自傷、他害行動のエピソード記述を検討する。昼食時、支援者および関与観察者との接面で生じるリョウタの自傷・他害行動にはどのような意味が内在していたのかについて検討する。

本事例研究については、支援センターを通して保護者に事例研究主旨と意義を伝え、研究および発表等に関する許可を得ている。

(結果)

観察期間に記述された昼食時のエピソード記述、4場面を検討の対象とした。

エピソード記述は、背景、エピソード、考察からなるものである。紙面の関係で、ここでは、エピソード部分2場面のみを掲載する。

〈エピソード1〉11時30分頃に、隣の部屋からお弁当の歌が聞こえると、リョウタは先生に近づき、「お弁当はまだ？」というように白板に書いてある「お弁当」という文字を指差したり、時計を見たりを繰り返した。リョウタの顔には少し笑顔が浮かび、お弁当が楽しみであるということが伝わってきた。しかし、先生に「ごめんね、お昼まだなんだ、12時まで待ってようね」と言われてしまい、リョウタの表情が徐々に曇っていった。とても残念がっているように感じ、私まで悲しい気持ちになった。諦めたのか、すぐにその場を離れたが、その後も落ち着かず、ずっとそわそわしたり体を上下に揺らしたりしていた。待ちきれないのだろうと感じ、私は早くお昼の時間になるように願いながら、何度も時計を確認していた。

〈エピソード2〉11時30分頃、リョウタは白板の「お弁当」の部分に指差したり、時計を見たりをし始めた。体を上下に揺らす動きが見られ、早くお弁当が食べたいという気持ちが伝わってきた。

12時になり、リョウタは素早くお弁当の準備を始めた。お弁当の準備を終えると体をゆらゆら揺らして歌いだした。もう少しでお弁当を食べられることが嬉しいのだろうと感じ、私が「よかったね」と声をかけると、リョウタは嬉しそうにチラッと私の方を見た。しかし、他の子たちの準備が終わらず、食べることができなかった。徐々にリョウタの表情が硬くなっていき、体を激しく上下に揺らす様子や私たちの腕をお弁当の方に引っ張る動きが見られ、早く食べたくて仕方がないのだろうと感じた。先生もリョウタの「早く食べたい」という気持ちを感じたのか、「待たせてごめんね、みんなの準備が終わるまで待っててね」と言った。リョウタは硬い表情のまま待っていたが、我慢の限界であるのか、自傷・他害行動が出始めた。食べたいのにずっと待たされ、苛立っているのだろうと感じ、先生も私も、他の子たちに早くお昼の準備を終わらせるように言葉かけをした。やっと準備が整い「いただきます」をすると、リョウタはお弁当を勢いよく食べ始めた。口元が緩み、目を閉じて一息つく姿が見られ、やっとお弁当を食べられたことへの嬉しさが伝わってきた。

エピソード1、2には、センターでのお昼を楽しみにしているリョウタが、お昼という状況(文脈)に埋め込まれた手がかりを利用して、自分の食べたいという気持ちを支援者に表現することができるということが明確に描かれていると考えられる。また関与観察者自身の感情の描写には、リョウタがまさに今ここで感じているであろう思いを、リョウタとして感じている関与観察者の様子が反映されると思われた。

(考察)

鯨岡は、接面で生じる対象の心のあり様を、間主観性あるいは間身体的に響くといった言葉で表現してきた。支援を要する対象と関与観察者はお互いに主体ではあるが、一方の視点に立てば、他者でしかない。生きてきた背景も立場も違う者同士が、対等に全く同じにわかるという体験ができるとは言い切れない。しかし、昼食という繰り返される文脈の中で、「対象としての主体」を関与観察者が描きだそうとしたとき、共に生きるかたちとして、自傷・他害行動に至るかかわりのパターンが描きだされた。昼食は、みんなと一緒に取る文化の常識が重要か、明確に描き出された本人の昼食への動機と要求を受け入れて動くことが重要か、「対象としての主体」の育ちにかかわる我々が、葛藤すべきポイントを示しているのではないかと思われた。

(文献) 鯨岡峻(2014)「接面」の観点から発達障害を再考する。発達, 137(35), 42-49.

(ISHIKAWA Yumiko, AONO Kiyoka, MORISHITA Toshikazu)